

アキナスにおける認識的正当化について

上 枝 美 典

1 正当化理論の抽出

現代認識論の文脈の中に、過去の認識論を位置づけようとする試みがいくつかなされてきたが、そのほとんどは、方法論的反省が不十分であるために、所期の目的を達成していない。過去の認識論を現代認識論の文脈中に位置づけようとするときには、まず、対象となる認識論の中から、認識的正当化についての理論（以下、「正当化」と言えば、「認識的正当化」を意味する）を抽出し、その抽出され、再構成された正当化理論に対して、検討を加えるべきである。

アキナスは、認識的正当化について、明示的には論じていないように思われる。しかし、このことから直ちに、アキナスに正当化理論が存在しないと結論するのは早計である。潜在的に含まれている正当化理論を抽出できる可能性があるからである。

正当化理論を抽出する一般的な方法は、「知識とは正当化された真なる信念である」という定義から導くことができる。この定義は、読み替えると、「正当化とは、真なる信念と知識との差である」となる。すなわち、ある理論において、真である信念と知識の間に差があるならば、正確には、真である信念は知識に満たないと考えられているならば、その理論には正当化理論が存在すると言えるのである。

では、アキナスにこの問いを問うてみよう。「真である信念は、知識であるか」。アキナスは「知識である」と答えるように思われる。しかしそれは、アキナスが正当化を考えていないからではなくて、「真」の意味が異なるからである。中世における「真理」の概念は、現代の（そしておそらく古代や近代の）それよりも遙かに豊かな文脈と内容を持つ点に注意すべきである。

現代の文脈において、「真」「真理」は、信念の内容と事実との一致を意味するにすぎない。それゆえ、たまたま偶然に事実を言い当てた場合にも、その信念は「真」であると言われる。しかし、アキナスにおいて、「真」は、そのような単なる抽象的な対等関係ではない。真理は認識能力の完成である。したがって、たまたま偶然に生じたような対等関係は、真理の名に値しないのである。

言い換えれば、アキナスの視点から見ても、現代的な意味での「真」なる信念は、それだけでは知識であるには不十分であり、それは、アキナスが了解する意味で「真」なる信念でなければならない。もしそう言えるならば、アキナスにおいても、現代的な意味における「真なる信念」と「知識」の間には差があるのであり、先ほどの議論が正しければ、アキナスにも正当化理論が存在することになる。

そしてその内容は、大まかに、アキナスにおける「真」から、現代的な「真」を差し引いた残りである。簡潔に言えば、アキナスの「真」から信念内容と事象との対等関係を差し引いた残りが、彼の正当化理論であることになる。アキナスの真理論は、現代的な視点から見ると、余計なものがいっぱい入っているように見えるが、このように、一種の正当化理論として見ることで、それを再評価する新たな視野が開かれるように思われる。

2 アキナスの正当化理論を真理論から抽出する

それでは、アキナスの真理論に含まれている正当化理論とはどのようなものであろうか。正当化理論として見たときに、まず指摘すべきは次の二点である。

一つは、「知性の真理」と呼ばれる、認識能力の完成としての「真」である。アキナスにおいて、「真なる信念」が十分に知識であると思われる主な理由は、「真」のこの含意による。アキナスにおいて、「真なる信念」とは、単に事物と対等関係にある信念ではなくて、認識能力の完成として生み出され、しかも、次に見る形而上学的関係としての真によって、事物と対当することが保証されている信念である。

それゆえ実に真理は、「何であるか」を認識する感覚や知性において、あたかも何らかの真なる事物において存在するようなしかたで存在しうる。しかし、認識されたものが認識するものにおいて存在するようなしかたで存在することはない。「真」という名はこのことを意味する。なぜなら認識されたものとしての真は、知性の完成だからである¹。

知性の真理は、知性が在るものを在ると言い在らぬものを在らぬと言う限りにおける、知性と事物との対等であるから、知性において、知性が語ることがらに真理が属するのであって、知性がそれによって語る働きに真理が属するのではない。なぜなら、事物は質料的だが知性は非質料的なので、知性認識する働きそれ自体が事物に等しくなることは真理に必要とされず、むしろ知性が知性認識することによって語り認識することだけが、知性が語るとおりに事物においてもそうであるというしかたで事物に等しくなることが必要なのだから²。

¹ Veritas quidem igitur potest esse in sensu, vel in intellectu cognoscente *quod quid est*, ut in quadam re vera: non autem ut cognitum in cognoscente, quod importat nomen *veri*; perfectio enim intellectus est verum ut cognitum. (ST I, q.16, a.2, c.)

² Cum enim veritas intellectus sit *adaequatio intellectus et rei*, secundum quod intellectus dicit esse quod est vel non esse quod non est, ad illud in intellectu veritas pertinet quod intellectus dicit, non ad operationem qua illud dicit. Non enim ad veritatem exigitur ut ipsum intelligere rei aequetur, cum res interdum sit materialis, intelligere vero immateriale: sed illud quod intellectus intelligendo dicit et cognoscit, oportet esse rei aequatum, ut scilicet ita sit in re sicut intellectus dicit. (SCG I, c.59, n. 495; emphasis added)

被造物において見いだされる真理が、事物の存在性と、事物の知性への対等または知性の事物または事物の欠如への対等以外にはないこと、そしてこれらすべてが神によることは明らかである。なぜなら、それによって対等する事物の形相自体が神によって在るのだし、また、『ニコマコス倫理学』第六巻で述べられているように、真それ自体は知性の善としてある。なぜなら、おのおのの事物の善はその事物の完全な働きにおいて成立するが、知性の完全な働きは真を認識することにおい以外にはないのだから、知性である限りにおける知性の善は、このことにおいて成立する。したがって、すべての形相と同様すべての善も神に由来するのだから、すべての真理が神に由来すると、無条件的に言わなければならない³。

もう一つは、認識の成功を保証する形而上学的基盤としての「真」である。これは超越的概念の一つとして説明されることがあるが、すべてを認識しうるものとしての「魂」と、それに対応する可知性を有する「事物」との間に成立する存在論的・形而上学的関係である。これを認める点で、アキナスの世界は、ヒュームが帰納的推論の誤謬を指摘することによってカントを目覚めさせる以前の世界観を典型的に示すものである。後述するが、このようないわゆる「出来合いの世界」を前提とする点で、彼は信頼性主義者ではあり得ない。

各のものは、存在を持つ度合いに応じて認識されうる。このために『デ・アニマ』第三巻では「魂は」感覚と知性において「ある意味ですべてである」と言われている⁴。

真が知性の善であるように、偽は知性の悪である。われわれは自然本性的に真を認識することを欲求し、偽に欺かれることを避ける⁵。

他のしかたによれば、一つの在るものが他のものに一致する限りで…。在るものの知性への一致を、この真という名は表現している。…認識はすべて認識者が認識される事物へ類似化することによって完成する。したがって、今言われた類似化が認識の原因である。

³ Patet ergo quod veritas in rebus creatis inventa nihil aliud potest comprehendere quam entitatem rei et adaequationem rei ad intellectum vel aequationem intellectus ad res vel ad privationes rerum, quod totum est a Deo quia et ipsa forma rei per quam adaequatur a Deo est, et ipsum verum sicut bonum intellectus ut dicitur in *VI Ethic.*, … quia bonum uniuscuiusque rei consistit in perfecta operatione ipsius rei, non est autem perfecta operatio intellectus nisi secundum quod verum cognoscit, unde, in hoc consistit eius bonum in quantum huiusmodi …; unde, cum omne bonum sit a Deo et omnis forma, oportet absolute dicere quod omnis veritas sit a Deo. (*De Verit.* q.1, a.8, c.; emphasis added)

⁴ Unumquodque autem in quantum habet de esse, intantum est cognoscibile. Et propter hoc dicitur in *III de Anima*, quod anima est quodammodo omnia secundum sensum et intellectum. (*ST I*, q.16, a.3, c.)

⁵ Sicut verum est bonum intellectus, ita falsum est malum ipsius: naturaliter enim appetimus verum cognoscere et refugimus falso decipi. (*SCG I*, c. 61, n. 513)

…ゆえに、在るものの知性への第一の関係は、在るものが知性に一致することである。なぜなら、実にこの一致が知性と事物との対等と言われているのであり、ここにおいて、形相的に真の性格が完成する。ゆえに、真が存在するものに付加するのはこのこと、すなわち事物と知性の一致ないし対等であり、この一致に、既に述べられたように、事物の認識は伴う。したがって、それゆえ、事物の存在性が真理の性格に先行するが、認識は真理の一種の結果なのである⁶。

周知のごとく、知性をはじめとする認識能力がどのように働き完成するかということについて、アキナスは多くの紙幅を割いて詳細に論じている。そこに展開されるのは、対象の形相がいかにして認識者の中に再現されるかという、中世という時代的制約の下での一種の自然主義的説明である。後で触れる習慣や徳についても、あくまでもそれらは、認識能力の完成のために必要な仕組みとして言及されているように思われる。

以上の点をまとめると、アキナスにおける真なる信念が、現代的な意味での真なる信念に付け加えているものとは、(1) 外界の事物の認識という事態の成立を保証する形而上学的枠組みと、(2) 当の信念が、適切な認識能力の完成として生み出されたものであるという要請の二点である。したがって、現代風に定式化すると、アキナスの知識の定義は、少なくとも最初の近似として、以下のように記述できる。

【定義A】

Sがpを知っているのは、以下のすべての条件を満たすとき、そのときに限る。

1. Sはpを信じている。
2. pは(現代的な意味で)真である。
3. pという信念はSの認識能力の完成として生み出されている。
4. Sは、Sの認識能力の完成がpという真なる信念を生み出すことが神によって保証されている環境にいる。

(「認識能力」を「知る能力」と理解すると、この定義は循環するので、「認識能力」から「知る」という含意を排除する必要がある。ここでは「認識能力」=「信念を生み出す能力」と理解しておく。)

⁶ ... Alio modo secundum convenientiam unius entis ad aliud, ... convenientiam vero entis ad intellectum exprimit hoc nomen verum. Omnis autem cognitio perficitur per assimilationem cognoscentis ad rem cognitam, ita quod assimilatio dicta est causa cognitionis, ...: prima ergo comparatio entis ad intellectum est ut ens intellectui concordet, quia quidem concordia adaequatio intellectus et rei dicitur, et in hoc formaliter ratio veri perficitur. Hoc est ergo quod addit verum super ens, scilicet conformitatem sive adaequationem rei et intellectus, ad quam conformitatem, ut dictum est, sequitur cognitio rei: sic ergo entitas rei praecedat rationem veritatis sed cognitio est quidam veritatis effectus. (*De Verit.* q.1, a.1, c.)

このように、アクィナスの真理論から正当化の要素を抽出してみると、それはどのように評価できるだろうか。

わたしは、これは一種の因果説であると思う。すなわち、ある真なる信念は、適切な環境において適切な能力の完成として生み出されたとき、知識である。そしてその能力の完成は、質料・形相論に基づく自然主義的な記述によって説明される。それは、いかにして対象の形相が主体の精神の中に再構成されるかという因果的説明である。したがって、認識能力の完成とは、適切な認識の因果連鎖の成立を意味するのであり、その限りにおいて、それは正当化理論としては因果説の一種と言わざるをえない。

3 ゲッティエ問題

因果説は、ゴールドマンがゲッティエ問題を回避する一案として提出した、正当化理論の古典である。アクィナスの正当化理論が因果説であるならば、ゴールドマンのそれと同じ長所と短所を持つはずである。

因果説の長所は、ゲッティエ問題を回避できる点である。まず、ゲッティエ問題を示す。

事例 1

A…「採用されるのはジョーンズであり、ジョーンズのポケットにはコインが10枚ある」

B…「採用される人のポケットにはコインが10枚ある」

1-1. スミスはAを信じている。

1-2. スミスはAを信じる強い証拠を持っている（そう信じることに於いて正当化されている）。

1-3. AはBを含意し、スミスはそれを理解している。したがって、スミスはBを信じることに於いて正当化されている。

1-4. 実際には、Aは偽であり、Bはたまたま真であった。（採用されるのは実はスミスであり、さらに偶然に、スミスのポケットにコインが10枚あった。）

1-5. スミスはBを信じることに於いて正当化され、かつBは真であるが、スミスはBを知っているとはいえない。

1-6. ゆえに、知識とは正当化された真なる信念であるという定義は不十分である。

事例 2

A…「ジョーンズはフォードを所有している」

B…「ブラウンはバルセロナにいる」

2-1. スミスはAを信じている。

2-2. スミスはAを信じる強い証拠を持っている（そう信じることに於いて正当化されている）。

2-3. Aは（AまたはB）を含意し、スミスはそれを理解している。したがってスミスは、（Aまた

はB) を信じることに於いて正当化されている。

2-4. しかし実際には、Aは偽であり、Bがたまたま真であった。

2-5. ゆえに、スミスは(AまたはB)を信じることに於いて正当化され、しかも(AまたはB)は真である。しかし、スミスはそれを知っているとはいえない。

2-6. ゆえに、正当化された真なる信念という知識の定義は不十分である。

ゲッティエ問題は、正当化された真なる信念が、知識でない場合が存在することを指摘することによって、「正当化された真なる信念」という定義が、知識の定義として不十分であることが示すものである。事例1では、Sがpを信じることに於いて正当化されるときにも、実際にはpが偽である可能性があるという問題点が、また事例2では、pがqを論理的に含意するとき、Sがpと $p \rightarrow q$ を信じることに於いて正当化されるならば、Sはqを信じることに於いても正当化される、という、いわゆるdeductive closureに関する問題が指摘される。

さて、ゴールドマンの因果説(Goldman 1967)は、pという信念B(p)が知識であるためには、pという事実(p)と信念B(p)の間に、因果の連鎖を要求する。テーブルの上に十枚のコインがあり、それを見た人が「テーブルの上に十枚のコインがある」という信念を持つならば、その信念は事実によって生み出されたのであり、事実と信念の間に因果的な連鎖が存在する。このような因果連鎖があるとき、そのときに限り、信念は正当化されるとするのが、因果説である。

ところが、事例1において、「採用される人のポケットには十枚のコインがある」というスミスの信念が真であるのは、スミスが考えたように、ジョーンズが採用される人であり、かつジョーンズのポケットには十枚のコインがあるからではなく、実はスミス自身が採用される人であり、しかもスミス自身のポケットに、たまたま十枚のコインがあったからである。このとき、事実と信念の間に因果連鎖は存在しない。スミスの信念は、「ジョーンズが採用され、ジョーンズのポケットに十枚のコインがある」という誤った信念から生じたのであり、スミスが採用され、スミスのポケットに十枚のコインがあるという事実から生じたのではない。したがって、スミスのたまたま真である信念は、事実との因果連鎖を欠くので知識ではない。

また、事例2においても、「ジョーンズがフォードを所有しているか、あるいは、ブラウンがバルセロナにいる」という信念をスミスが持つようになった原因は、彼が誤って(しかし十分な証拠に基づいて)、ジョーンズがフォードを所有していると信じたからであった。しかし、その命題が真であるのは、ブラウンがバルセロナにいるという事実によってである。したがって、その信念と事実との間に、因果連鎖は存在しない。それゆえ、スミスのたまたま真である信念は知識ではない。

4 アクィナスとゲッティエ問題

さて、ゴールドマンの因果説は、以上のようにゲッティエ問題を解決できる。ではアクィナスは、ゲッティエ問題に対してどのように言うだろうか。まず、事例1について、「採用される人のポケッ

トには10枚のコインがある」という認識が成立するためには、そのような事態ないし事物（res）が存在していることが、まず必要であろう。そしてその事物の形相を正しく受け取ることによって、真なる認識が成立するのだとすると、事例1のような一種の勘違いによって得られ、たまたま表面的に当たっているような認識は、真の認識とは認められないであろう。なぜなら、その認識は、事物の形相を正しく受け取ることによって成立していないからである。（具体的には、1-2が正当化された信念、トマスの用語では真なる認識として認められない。）

同様に、事例2についても、（AまたはB）が真であるのはBという事実によるとすると、事物Bが有する形相が、スマスに正しく受け取られ、「Bである」という真なる認識が成立し、その上で、推論によって（AまたはB）という信念を得るという過程が要求されるであろう。したがって、「Aである」という（アクィナスの意味で）真ではない（つまりアクィナスの意味で正当化されていない）信念に基づいて（AまたはB）という信念を得たとしても、仮にそれがたまたま真であったとしても、それは知性の完成としての真理に達していない。（2-2に言われる正当化が認められない。）

このように、アクィナスの認識論は、ゲッティエ問題に対する免疫を持っている。それは、基本的にゴールドマンと同じような、対象と信念の間の因果連鎖を要求するような、因果説を採っているからだと思われる。

5 因果説の問題

以上のように、アクィナスの認識論は、因果説が持つ長所を共有している。では、短所も共有しているだろうか。因果説の致命的な欠点は、同じくゴールドマンによって指摘された（Goldman 1976）。

ヘンリーは息子と田舎道をドライブしていた。息子に教えるために、ヘンリーは目に入るものの名前を声に出して言っていた。「あれは牛」「あれはトラクター」「あれはサイロ」「あれは小屋」。ヘンリーの視力はよく、これらのものは十分近くにあってはっきりと見えていた。交通量も少なく注意深くそれらを見ることができたので、彼はそれを全く確信していた。この場合、ヘンリーは、たとえば「あれは小屋である」という信念を持つことにおいて正当化されるであろう。しかし、この状況に、以下のいくつかの条件を加えてみると事態は一変する。（1）このときヘンリーの車は、ハリボテの小屋がたくさんある地域に入っていた。そのハリボテの小屋は、精巧に作られていて、道を走る車からは、本物と全く見分けがつかない。（2）ヘンリーが「あれは小屋」と言ったとき、彼はたまたま本物の小屋を指していた。（3）しかし、仮にその時、彼がハリボテの小屋を見ていたとしても、それをハリボテと見破ることはできなかったであろう。この場合、（2）によって、「あれは小屋」というヘンリーの信念と、事実との間には因果の連鎖が存在する。しかし、（1）と（3）によって、その因果連鎖は、偶然に成り立っていることが明らかである。したがって、ヘンリーのたまたま真である信念は知識ではない。

因果連鎖による説明では、この場合、なぜヘンリーの信念が知識でないかを説明できない。そこには「直接的な視覚による認識」というきわめて単純で強力な因果連鎖が存在するからである。しかし、明らかにヘンリーはそれを知っていない。ゆえに、因果説は、知識でないものを知識と認めてしまう点で、弱すぎる理論であることが明らかである。

さて、もしもアクィナスの正当化理論が因果説であるならば、それはゴールドマンのこの反例の犠牲になるはずである。対象から形相を受け取り、その後続く適切な因果連鎖によって認識能力が完成し、知性の真理としての認識が成立するというモデルをとるならば、確かに、ヘンリーの認識能力は完成し、そこに「ものと知性の対等」が成立している。つまり「あれは小屋である」という認識において、ヘンリーの知性には真理が宿っている。したがって、「仮に偽物の小屋を指差していたとしても、ヘンリーはそれを偽物と見抜くことができなかつたであろう」、という点は、アクィナスにおいて、少なくとも認識の成立条件としては、考慮されていないように思われる。

このように、アクィナスの抽出された正当化理論は、因果説が持っている長所と短所を共に持っている。したがって、アクィナスの正当化理論を一種の因果説だと評価することに問題はないように思われる。では、因果説が不十分な理論であったように、アクィナスの正当化理論も不十分だと言うべきなのだろうか。

6 アクィナスの見かけ上の正しさ

現代の文脈から判断する限り、アクィナスの正当化理論は明らかに不十分である。ゴールドマンの反例において、ハリボテの小屋が果たす役割に注意すれば、その不十分さを良く理解できる。ハリボテの小屋は、アクィナスの用語では、偽の小屋である。偽なる事物とは、その外見において、実際とは異なる認識を生み出す（ただし必然的に生み出すわけではない）ような本性を持つ事物である。しかし、ゴールドマンの反例が指摘するのは、偽なる小屋が存在するとき、偽なる小屋に関する認識のみならず、同じフィールドにある真の小屋についての認識も損なうという点である。

しかし、アクィナスの文脈で考えた場合、ゴールドマンが言うような識別は必ずしも必要ないようにも思える。「あれは小屋である」という信念をヘンリーが持つとき、ヘンリーに備わった認識能力は、実際の小屋の形相に端を発する認識的因果連鎖によって完成し、知性の真理が成立している。それで十分ではないか？ それに加えて、偽の小屋と本物の小屋を見分ける能力が必要だとゴールドマンは言うが、そのような状況を想定すること自体、人間の認識能力を超えた想定ではないのか？ 端的に言って、ゴールドマンの反例は、知識にたいして厳しすぎる要求を課すものであり、間違った反例ではないのか？ このように、アクィナスの文脈で読むと、正しいのはアクィナスであり、ゴールドマンは間違っているように思える。

「知る」の意味がある程度文脈に依存する、つまり語用論上の差異があることは基本的に認められるとしても、これはあまりに大きな違いである。なぜ、アクィナスの有神論的文脈がこのような大きな違いを生み出すのだろうか。

7 信頼性主義

ゴールドマン自身が、このヘンリーの反例を克服するために採った方策は、一種の信頼性主義である。

This paper presents a partial analysis of perceptual knowledge, an analysis that will, I hope, lay a foundation for a general theory of knowing. Like an earlier theory I proposed, the envisaged theory would seek to explicate the concept of knowledge by reference to the causal processes that produce (or sustain) belief. Unlike the earlier theory, however, it would abandon the requirement that a knower's belief that p be causally connected with the fact, or state of affairs, that p .

What kind of causal processes or mechanisms must be responsible for a belief if that belief is to count as knowledge? They must be mechanisms that are, in an appropriate sense, “reliable.” Roughly, a cognitive mechanism or process is reliable if it not only produces true beliefs in actual situations, but would produce true beliefs, or at least inhibit false beliefs, in relevant counterfactual situations. The theory of knowledge I envisage, then, would contain an important counterfactual component. (Goldman 1976: 771, emphasis added)

ここで述べられているように、ゴールドマンの信頼性主義は因果説の発展型である。単純な因果説が、現実世界の因果連鎖だけを問題にするのに対し、この信頼性主義は、反事実的状况における因果連鎖をも要求する。

先ほどのヘンリーの事例で、ヘンリーの信念が知識だと認められるのはどのような場合であろうか。簡単に言って、それは、ヘンリーが偽の小屋と本物の小屋を見分けることができる場合であろう。したがって、ヘンリーの信念が正当化されるためには、「仮に偽の小屋があったとしても、それを判別することができたであろう」という、反事実的状况が必要である、とゴールドマンは主張する。つまり、ヘンリーが p を知っていると言えるのは、ヘンリーが、 p が真であるという現実の事態を、 p が偽である可能的な事態から区別することができるときである。そのような反事実的状况においても真なる信念を生み出すプロセスを、ゴールドマンは「信頼できる」(reliable)プロセスと呼ぶ。ゴールドマンは、このように、知識の因果説を反事実的状况にまで拡大することによって、彼の信頼性主義を提出する。ちなみにこの論文における暫定的な知識の定義は以下のようになっている。

At t S noninferentially perceptually knows of object b that it has property F if and only if

- (1) for some maximal set of nonrelational properties J and some *DOE* relation R , object b has (all the members of) J at t and is in R to S at t ,
- (2) F belongs to J ,
- (3) (A) b 's having J and being in R to S at t perceptually causes S at t to have some percept P ,
(B) P noninferentially causes S at t to believe (or sustains S in believing) of object b that it has property F , and
(C) there is no alternative state of affairs $\langle c, K, R^* \rangle$ such that
 - (i) $\langle c, K, R^* \rangle$ is a relevant perceptual equivalent of $\langle b, J, R \rangle$ for S at t relative to property F , and
 - (ii) F does not belong to K .

(Goldman 1976, 785-6)

この暫定的な定義によれば、ドライブ中のヘンリーの「あれは小屋だ」という信念は、上の条件(3)-(C)を満たさない(ハリボテの小屋に由来する知覚的同値 perceptual equivalent が存在する)ので、知識とは言えない。(3-C-iにある「知覚的同値」についても同様に詳細な定義がなされているが、ここでは割愛する。)

8 アクィナスは信頼性主義者か

かつて、アクィナスの認識論は一種の信頼性主義 (reliabilism) であるという主張がなされたことがある。もしこれが正しいならば、アクィナスの理論がヘンリーの反例に対して免疫を持っている理由を、アクィナスはもともと信頼性主義者であったという点に求めることができるかもしれない。

アクィナスと信頼性主義の関係について、たとえばプランティンガは次のように述べている。

…20世紀の知識理論におけるもっともエキサイティングな展開は、義務論が拒絶されたことと、多様な形態の外在主義が突然出現したことである。より正確には、この展開は、認識論における外在主義の出現と言うよりはむしろ再現なのである。外在主義は遠く遡り、トマス・リード、トマス・アクィナスを經由して、アリストテレスにまで至る。実際、デカルト以前の西洋思想において、認識論の内在主義者はむしろ希少であった。(Plantinga 1993a, v)

また、E・スタンプも、アクィナスの認識論が「信頼性主義の要素を持つ外在主義」であると主張したことがある⁷。これに対して、S・マクドナルドは、スタンプ論文の翌年に発表された論文で、アクィナスは基本的に強い内在主義を採っていると論じ、スタンプ説を批判した⁸。その後、*The Philosophical Review* 誌で *The Cambridge Companion to Aquinas* が取り上げられたとき、B・デイヴィスはマクドナルド論文の方を高く評価した。現段階では、アクィナスの知識理論についてのこの論争は、マクドナルド説が優勢のままに幕を閉じつつあるように思われる。

スタンプの主張を、もう少し詳しく見てみよう。彼女は、アクィナスの知識理論が信頼性主義であることを示すために、アクィナスが、神の創造と、神によって目的論的に調節された認知機能に言及する。

アクィナスの考えでは、われわれの認識能力は、われわれを神がそうであるような真理の認識者にするというはっきりした目的にしたがって、神によってデザインされている。特に、われわれが感覚や知性を、神がデザインしたとおりに、適切な環境の中、つまり神が人間をそこへ向けて造った世界の中でそれを使うとき、それらの能力は絶対的に信頼できる。…彼のこのような考えを見れば、彼の知識理論を、信頼性主義の要素がある一種の外在主義と見なすことは合理的だと思われる（Stump 1992: 147-8）。

残念ながらこの議論は合理的ではない。認識能力が基本的に信頼できるものであるということは、信頼性主義の必要条件ではあっても十分条件ではない。もし十分条件であるとしたら、認識能力はふつう信頼できるものだろうから、懐疑論を除くほぼすべての認識論は信頼性主義であり、信頼性主義を立てる意味がなくなってしまうだろう。この点はマクドナルドが正しく指摘している。

アクィナスが明らかにわれわれの認識能力の信頼性を主張しているという事実は、彼の考えが信頼性主義であるとか外在主義であるということを示すものではまったくない。信頼性主義を奉じる者は、われわれの信念形成メカニズムが信頼できるということだけでなく、任意の命題を受け入れる正当さが、われわれの信念がそのようなメカニズムによって引き起こされたという事実に存するということを主張しなければならない（MacDonald 1993: 186-7）。

⁷ When the issue is adjudicated, however, it should be resolved with a clear recognition of Aquinas as holding not Foundationalism but rather an interesting theological externalism with reliabilist elements. (Stump 1992: 158, emphasis added)

⁸ Some recent commentators have argued that, despite appearances, Aquinas is an externalist about justification and knowledge …Aquinas held a sort of externalist reliabilism … . The view is untenable as an interpretation of Aquinas, however, for he quite explicitly commits himself to a strong version of internalism with regard to paradigmatic knowledge and justification. (MacDonald 1993: 185-6, emphasis added)

認識能力の信頼性が、正当化の必要にして十分な条件であることを主張するのが信頼性主義なのだが、スタンプはこの点を見落としているように見える。したがって、彼女の議論は彼女の結論を導くには不十分である。

もう少し詳細を見よう。先に抽出して定式化したアクィナスの正当化理論は次の通りであった。

【定義A】

Sがpを知っているのは、以下のすべての条件を満たすとき、そのときに限る。

1. Sはpを信じている。
2. pは（現代的な意味で）真である。
3. pという信念はSの認識能力の完成として生み出されている。
4. Sは、Sの認識能力の完成がpという真なる信念を生み出すことが神によって保証されている環境にいる。

しかしこの中に、アクィナスが信頼性主義であることを示す要素は何もないように思われる。3に含まれている「認識能力」という言葉が、徳認識論を連想させるかも知れない。徳認識論には、現在のところまったく異なる二つの種類がある。一つは、信頼性主義の発展形態としてのそれであり、もう一つは、認識的義務論の一種としての徳認識論である。アクィナスの理論が信頼性主義でない限り、それが前者のタイプの徳認識論ではある可能性はない。

そもそも、信頼性主義は、肯定的な側面と共に否定的な側面を持つ。肯定的な側面を簡単に言えば、「Sが持つある真なる信念が正当化されるのは、その信念がSの信頼できるプロセスによって生み出されたときに限る」、と表現できる。しかし、否定的に言えば、「信念を正当化するものは、認識プロセスの信頼性でしかない」、ということである。これは、正当化と真との論理的なつながりを放棄した考え方である。たとえば視覚は、さまざまな表象をわたしたちに見せている。しかし、それが真の姿を伝えているかどうかは、信頼性主義によれば、とりあえず関係ない。むしろヒュームの帰納的推論批判に同意する人々は、人間がそのような関係を前提することはできないことに同意する。必要なのは、視覚というシステムの信頼性である。もしそれが、多くの場合に真の情報を伝えるのであれば、つまりそのシステムの信頼性が高いのであれば、その信頼性の高さという点でのみ、信念が正当化されることを認めようというのが、信頼性主義の精神である (Greco 1999)。

他方、アクィナスの正当化理論は、「真」という言葉を用いて表現されているように、認識能力の完成が、特に妨げられることがない限り、必ず真なる認識を与えるものと想定されている。これはスタンプが先の引用で述べているとおりである。正当化と（現代的な意味での）真理との関係は、アクィナスにおいてはこのように必然的である。したがって、この意味でも、アクィナスは信頼性主義者ではないと判断すべきである。

9 アクィナスと外在主義

では、外在主義についてはどうだろうか。先に示したように、スタンプは、アクィナスが「興味深い神学的外在主義」であるとし、マクドナルドは、逆に「強い内在主義」であると論じた。およそある一つの正当化理論が、ある人には外在主義に見え、他の人には強い内在主義に見えるなどということは考えられないので、ここには議論のすれ違いがあるように思われる。

実際、マクドナルドは、彼自身が明言しているように、アクィナスの *scientia* について語っている。アクィナスが内在主義であり基礎付け主義であるというマクドナルドの主張は、アクィナスの正当化理論が、*scientia* に関する論述をもとに理解されるべきだという主張にほぼ全面的に依拠している。

彼（アクィナス）の認識論が、彼の *scientia* についての理論と同じ範囲にわたると考えるのは誤りである。しかし、彼は、彼の理解する厳密な意味での *scientia* を、認識論の正当化のパラダイムと見なす。他の種類の正当化は、それによって理解され、また、それが基準になって判定される。その意味で、*scientia* の説明は、単に彼の知識理論の一部ではなく、その要石である（MacDonald 1993: 177）。

アクィナスの *scientia* 論は、『アリストテレス分析論後書注解』に典型的に見られるように、アリストテレスの三段論法を道具とする、論証的、学問的な知識をその対象にしている。この場合、*scientia* とは、完全で、確実な *cognitio* であり、それは必然的なもののみ関わる。これに対して、ゲッティエ問題に触発された現代認識論が問題にするのは、主として経験的命題である。例えば、ゴールドマンは次のように述べている。

わたしの関心は、経験的命題についての知識だけに関わる。経験的でない真理の知識については、伝統的な分析で十分だと考えるからである。（Goldman 1967）

つまり、信頼性主義が生まれるもとになったゲッティエ問題は、そもそも、「ブラウン氏がフォードを所有している」というような経験的命題に関するものであり、「三角形の内角の和は二直角である」や「すべての人間は動物である」というような必然的命題に関わるものではなかった。したがって、マクドナルドが *scientia* をアクィナスの知識理論のサンプルに選ぶのは間違っている⁹。ものごとは同じ土俵で論じるべきであり、現代認識論の文脈でアクィナスを見るのであれば、アクィ

⁹ ただしこれは、アクィナスの認識論全体における *scientia* 論の重要性を否定するものではない。アクィナスがそもそも認識というものをどのように考えていたかを理解するために、*scientia* 論は避けて通れない。ここでは、現代認識論の文脈で考えるならば、「知識」のサンプルとして *scientia* を選択するのは偏りがありすぎる点を指摘している。*scientia* の側面からのこの問題へのアプローチとしては、(Jenkins 1997)、および(上枝2004)を参照。

ナスの知識理論も、経験的事実に関する範囲で論じるべきである。

論証的、学問的認識である *scientia* をサンプルに採れば、それが基礎付け主義であり、内在主義であることは当然のことである。現代の言葉では、そのような知識は公理的体系と呼ばれる。公理的体系について、それが「強い内在主義」であると言ったところで、現代認識論にとって目新しいものは何もない。ましてや、そのことから、人間の知識、それも経験的知識の全体が、そのようなモデルにしたがって理解されるべきだということは出てこない。おそらく、もっとも極端な外在主義者であっても、数学の試験では、基礎付け主義と内在主義に基づいて答案を書くだろう。「なぜだか分からないが、この答えが、わたしの正常な認知プロセスにしたがって生み出されたのだ」というような数学の証明問題の答案を、まじめに採点する教師もいまい。内在主義が深刻な問題に直面するのは、あくまでも、経験的知識に関してなのである。

アクィナスの正当化理論をまず抽出すべきである、というわたしの主張は、この点においても有効である。アクィナスの正当化理論が外在主義かどうかを考えるとときに問うべき問題は、【定義A】において、Sが3と4を自覚しておく必要があるかどうかである。

わたしは、アクィナスの場合、3と4の自覚については、どちらも正当化の必要条件ではないのではないかと思う。一つには、アクィナスの認識論は、人間だけでなく動物にも適用される。反省的知識を持たないとされる動物にも、知識を認めるのであれば、何らかのしかたで外在的な正当化を認めていることになろう。また、特殊な事例としては、「預言」という事例にも注目したい。現代の議論において、「予知」や「千里眼」のような事例は、信頼性主義や徳認識論にたいする反例としてよく引き合いに出される。つまり、それらがいかに信頼できるプロセスや能力や徳によって生み出された真なる認識であろうとも、認識主体が手にしている通常の証拠に照らし合わせて整合性がないならば、その信念は正当化されないと論じられる。つまり、信頼性主義においても、整合性に基づく内在的な正当化が必要である、という議論だが、アクィナスの場合には、あっさりと、預言による認識ということが語られている。あたかも、神の働きによる認識能力の完成ということだけに目が向けられ、認識主体の内面などまったく問題ではないかのごとくである。

預言は、人間的な認識から離れて存在する一種の認識を意味する¹⁰。

人間がそれによって神の友人となる愛は意志の完成である。…しかし預言は知性の完成である¹¹。

¹⁰ *prophetia importat cognitionem quamdam procul existentem a cognitione humana.* (*ST II-IIae*, q.172, a.5, c.)

¹¹ ... *caritas, secundum quam fit homo amicus Dei, est perfectio voluntatis, ... Sed prophetia est perfectio intellectus, ...* (*ibid.*, q.172, a.2, ad 1)

預言とは、ある種の教授というしかたで神の啓示によって預言者の知性に刻印された一種の認識である。…したがって、預言に虚偽はありえない¹²。

人間の認識の上に神によって啓示されることがらは、人間の理性を越えているので、その人間の理性によって確かにされるのではなく、神の力の働きによって確かにされる¹³。

もちろん、アクィナスは、人間が反省的な認識を行いうることを指摘しているし、それを高く評価する。しかし、そのようなこともできる、ということと、そのようなことが必要である、ということとは違う。知識や正当化の分析に求められるのは後者である。アクィナスは、真理の認識について、事物と知性の対等それ自体を認識する知性の働きに言及し、そのように真であることが自覚された認識を、認識者としての完成であると述べている。しかし、アクィナスにおいても、そのような内省は、認識および正当化にとっての十分条件ではあっても必要条件ではないように思われる。この点、内在主義の成立以前であるアクィナスにおいては、内在主義・外在主義の選択にかんする理論的負荷が弱いため、はっきりとしたことをテキストから読み取るのは難しい。アクィナスが内在主義的要素を明示的に要求していない限りにおいて、彼を「有神論的外在主義」(Stump 1992, 158) と呼ぶことはあからさまな誤りではないが、わたしには、アクィナスは外在主義的正当化の可能性を排除していなかったと理解するに止めるのが穏当だと思われる。

10 基礎付け主義と整合主義

最後に、基礎付け主義と整合主義について、簡単に述べておく。認識的正当化について、基礎付け主義と整合主義の対立というのがある。しかし、この対立は、外在主義や信頼性主義が問題になるところでは、少し焦点がずれてくる。そもそも、基礎付け主義と整合主義の対立は、信念と証拠の関係を、構造としてどのように捉えるか、という問題領域にあるものである。先に述べたように、信頼性主義は、「証拠」という考えを放棄するところからスタートする。p という信念が、q という信念が真であることの指標であるとき、p は q の証拠であると言える。しかし、そのような論理的な指標は存在しないというのが、信頼性主義の出発点である。せいぜいそこには、プロセスや能力の「信頼性」の度合いがあるだけである。したがって、本来、信頼性主義が問題になるところで、基礎付け主義や整合主義を正しく論じることはできないのである。

もちろん、わたしたちの解釈では、アクィナスは信頼性主義ではない。しかし、内在主義を要求しないという意味で消極的な外在主義である。外在主義も、自らが持つ信念が正当化される理由を、

¹² ... , propheta est quaedam cognitio intellectui prophetae impressa ex revelatione divina per modum cuiusdam doctrinae. ... Unde prophetiae non potest subesse falsum. (ibid., q. 171, a. 6, c.)

¹³ Ea autem quae supra humanam cognitionem divinitus revelantur, non possunt confirmari ratione humana, quam excedunt: sed etiam operatione virtutis divinae, ... (ibid., q. 171, a. 1, c.)

当の主体が知っていなくてもよいという主張なので、本来、証拠主義内部の議論である基礎付け／整合主義を論じにくい。それゆえ、アキナスの理論も、やはり基礎付け主義・整合主義を十分に論じられる場所にはないように思われる。仮に論じられるとしても、それはマクドナルドがしたように、ある限定的な領域において、正当化の構造を取り出すことはできるだろうが、やはりマクドナルドの議論が示しているように、それが正当化理論や知識論の観点から興味深いものを含むとは思えない。

11 結 語

以上見てきたように、アキナスの正当化理論は、有神論的因果説であり消極的な外在主義である。因果説、および一種の外在主義である点で、ゲッティエ問題を解決できる。また、因果説である限りにおいてヘンリーの反例を処理できない。しかし、有神論的因果説である限りにおいて、その反例を強すぎる要請と見なすことができる。あらゆる（有意で）可能的な類似物から識別することができなければならない、という要請は、アキナスの文脈では強すぎる要請である。人間に備わった能力が、通常の完成に導かれ、そこに事実上真理が成立しているならば、それは知識である。しかし、こう言えるのは、「知識」というものをデザインした「神」という超越的な視点から、この世界を見下ろしているからである。神が見下ろす世界において、神が設計した人間の認識という働きが、神が意図したとおりに働いて、意図した完成に至っている。そしてそれは知識を生み出している。

このような思想において、知識とはいったい何であるのか。「真理を伝えようとする神の動機の実現」という表現をするならば、それは、ザグゼブスキが言うような、「動機」を中心としたvirtue responsibilismへの接近を感じさせる。彼女は次のように述べる。

要するに、私の提案は次の通りである。もしも認知的主体が真理を獲得したいという動機を持ち、その動機のゆえに信頼できるしかたで行為し、その動機と、その動機が生み出した信頼できるプロセスのゆえに真理に到達することに成功するならば、そのような認知主体こそ、単に真なる信念ではなく知識に値する認識的ステータスに到達した人である (Zagzebski 2000: 121)。

「動機」や「意図」という概念は、ゴールドマンが重視した「原因」という概念の分析に用いることもできる、哲学的に興味深い概念である。もしも、「原因」がこれらの概念によって記述されるならば、そこには、義務論から出発するvirtue responsibilismと、因果説の発展形態であるvirtue reliabilismの対立 (Axtell 2000) を架橋する道が開かれてくるのではないか。しかしこの点については、稿を改めて論じることにしたい。

【参照文献】

- Axtell, Guy. ed. 2000. *Knowledge, Belief, and Character: Readings in Virtue Epistemology*, Lanham: Rowman and Littlefield Publishers Inc.
- Goldman, Alvin. 1967. "A Causal Theory of Knowing," *The Journal of Philosophy*, 64, 12: 355-372.
- . 1976. "Discrimination and Perceptual Knowledge," *The Journal of Philosophy*, 73, 20: 771-792.
- . 1979. "Reliabilism: What Is Justified Belief?" in *Justification and Knowledge*, ed. G. S. Pappas. Dordrecht: D. Reidel: 1-23.
- . 1991. "Reliabilism," in *Blackwell Companion to Epistemology*. Ed. Dancy and Sosa.
- Greco, John. 1999. "Agent Reliabilism." *Philosophical Perspectives*, 13, *Epistemology*. 273-296.
- Jenkins, John. 1997. *Knowledge and Faith in Thomas Aquinas*. Cambridge, UK: Cambridge UP.
- MacDonald, Scott. 1991. "Aquinas, Thomas (1225-74)," In *Blackwell Companion to Epistemology*. Ed. Dancy and Sosa.
- . 1993. "Theory of Knowledge." *The Cambridge Companion to Aquinas*. Ed, Norman Kretzmann, and Eleonore Stump. Cambridge, UK: Cambridge UP: 160-195.
- Plantinga, Alvin. 1993a. *Warrant: The Current Debate*. New York: Oxford UP.
- . 1993b. *Warrant and Proper Function*. New York: Oxford UP.
- Stump, Eleonore. 1992. "Aquinas on the Foundations of Knowledge." *Canadian Journal of Philosophy Supp.* Vol. 17: 125-58.
- Zagzebski, Linda. 2000. "From Reliabilism to Virtue Epistemology," Chapter 9 in Axtell 2000.
- 上枝美典 2004 「トマス・アキナスにおける認識的正当化と真理」、『中世思想研究』第46号（近刊）。
- 川添信介 2002 「トマス・アキナスにおける確実性について」、『哲学研究』第573号、26-49頁。